

浜松市北区引佐町久留女木地区における地域づくりの方策の研究

静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 船戸ゼミ

指導教員：教授 船戸修一

参加学生：金田鈴音・鈴木義人・八木彩樺（3年生）

小淵康成・高橋明日香（2年生）

植田勝也・富田菜々美・森田瑞希（1年生）

※ 1・2年生はオープン参加である

1 要約

現地に居住していなくても、「他出子」——集落から転出した子ども——が実家や集落に頻繁に通う姿はよく見られる。そうすると、昨今、人口減少や高齢化によって担い手不足に悩む中山間地域において他出子は、集落を支える担い手になり得る可能性がある。そこで今年度は、浜松市北区引佐町の「久留女木地区」を取りあげ、他出子の実態を明らかにした。ただ、新型コロナウイルス感染が9月まで拡大していたため、当初の予定を縮小して他出子についての調査を実施し、他出子と集落とのかかわりを明らかにした。

2 研究の目的

浜松の中山間地域、とりわけ北区引佐町の「久留女地区」では人口減少や高齢化によって地域社会の担い手が不足している。ここには、国による「日本の棚田百選」や県による「静岡県景観賞」に指定された棚田がある。2017年度のNHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」のロケ地にもなり、今も観光客が絶えない。久留女木地区は、このように観光客誘致につながる地域資源を有した地域である。しかし、この棚田も耕作者の減少に伴い、耕作放棄地が増加している。また現地の人口は年々減少し、高齢化も進んでいる。よって久留女木地区の他出子は、今後の棚田の米作りだけでなく、地域を支える担い手になり得る。このような他出子だけでなく、その子ども——集落に居住する地域住民（親）から見ると「孫」——も、他出子の帰省にあわせて現地に通うケースも見られている。昨今、このように地域とのかかわりを志向する人たちを「関係人口」と称し、その人口増加が期待されている。よって、他出子や孫も「関係人口」と位置づけたうえで、その実態を明らかにすることは、今後の集落づくりに資すると思われる。

3 研究の内容

今年度は、2006年度から船戸ゼミ生を中心にして取り組んできた久留女木地区の棚田における米作りや地域の活動支援を通して地域住民との関係を構築しつつ、地域住民への調査を実施した。

4 研究の成果

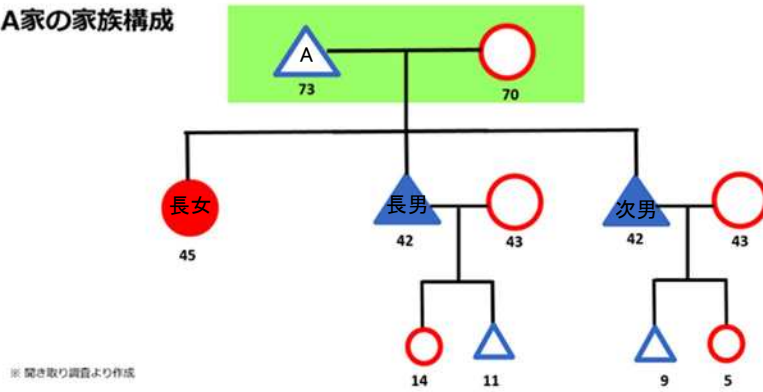
今年度は、北区引佐町久留女木地区の集落について調査した。今年度も浜松市役所の協力のもと9月から聞き取り調査を始める予定であった。昨今「65歳以上が半分以上を占める集落」を「限界集落」と呼び、その消滅危険性だけを煽る議論が盛んである。しかし「他出子（集落を出た子どもたち）」が集落の近くに居住し、彼ら彼女たちが頻繁に実家に通えば、そう簡単に集落は消滅することはない。このような集落を越えた家族関係についてのデータは、行政（浜松市）でさえ、全く把握していない。また週末など定期的に出

身集落の空き家に戻ってくる元住民がいる。このような人たちも住民票には存在しないが集落住民と安否確認、買い物・農作業支援などで関わっているならば集落を支える「潜在的な住民」である。今年、行政（浜松市）も把握していない、引佐町久留女木地区に定期的に通っている他出子の実態をアンケートによって明らかにする予定であった。さらに、その知見を踏まえ、「盆道づくり（集落での一斉草刈り）」や祭礼などの集落の共同作業や年間行事についてのチラシを作成ならびに「他出子（あるいはその子ども）」に配布し、地縁・血縁者による集落維持の実践活動も行う予定であった。

しかし、今年度は、現地での米作りについては野外での活動ということもあり、5月から本格的に取り組むことができたが、地域住民への調査は、コロナ感染症が収まってきた11月下旬から実施せざるを得なかった。聞き取り調査は、主に棚田で耕作に取り組む2人の70代の男性（Aさん、Bさん）に行った。ただ、コロナ感染防止の観点から集落維持活動

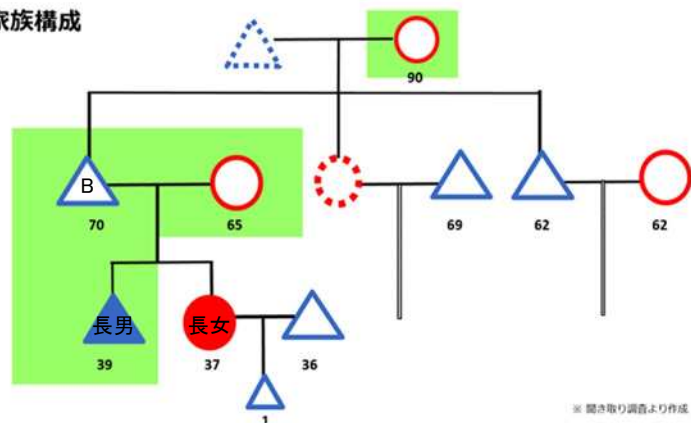
【図1】

A家の家族構成



【図2】

B家の家族構成



(盆道づくり)への協力は中止せざるを得ず、他出子やその子どもなど地縁・血縁者の帰省を促すための取り組みを実践することができなかった。

以下、聞き取り調査の結果について説明する。Aさんには、子どもが3人おり、全員実家を離れ生活している(図1)。A家の長男(40代)は、浜松市西区に住み、月1回は実家に帰省している。次男(40代)は、現在愛知県新城市に住み、月2回は実家に帰省している。長女(40代)は、浜松市北区に住み、月1回は実家に帰省している。A家の長男は、祭りや地元行事にも参加し、地域住民との関わりを深めている。しかし、長男以外、集落まで地域の人現関係を深めていないのが現実である。

Bさんには、子どもが2人おり、一人は同居しているため、他出子(長女)は1人である(図2)。B家の長女(30代)は、浜松市東区に住み、週1回は実家に帰省している。このように頻繁に実家に帰省するようになったのは、出産してからだという。実家の生活を支援するだけでなく、親による育児支援を目的として帰省する現実が明らかになった。

さらにA家もB家も他出子に声をかければ、棚田での農作業を手伝ってくれるという。このような支援が期待できるため、棚田での米作りを継続することはできる一方、自主的な参加ではないため、将来的な後継者と言えるところまでは至っていない。よって、今後は実家の親が他出子に対して実家への帰省頻度や生活支援を増やし、かつそれを集落住民まで関わりを拡大させていくことが望まれる。このように久留女木地区の場合、有力な地域資源である棚田があるからこそ、他出子が実家や集落との関わりを深めていく可能性を有している。

5 地域への提言

今回の調査によって久留女木地区の他出子が実家生活や棚田での米作りを支援している実態が明らかになった。しかし、他出子が定期的に実家や集落に通っており、米作りにも参加している。しかし、地域住民(親)が積極的に声をかけた結果であり、まだ自主的な参加と言えるような状況ではない。今後は、このような人たちを主体的に地域住民が活かしつつ、「関係人口」による地域再生につなげていくことが求められる。

6 地域からの評価

今年度から久留女木地域を対象に調査を開始したことで、これまで船戸ゼミが築いてきた「地域との関係」を活かした調査を実施することができた。コロナ禍で活動が制限され実際に聞き取った件数は少なかったが、今後はフィールドワークの場なども活用することで調査件数を増やし、「関係人口」による地域再生につながることを期待したい。【浜松市 市民協働・地域政策課 鈴木芙実】

研究活動の様子がわかる写真



久留女木地区の棚田での農作業（6月12日）



久留女木地区の棚田での田植え（6月5日）



久留女地区の棚田「収穫祭」の準備
（12月18日）



久留女木地区の棚田での稲刈り（11月17日）



久留女地区の棚田「収穫祭」においての
研究活動報告（12月19日）